

記録

16ミリ  
カラー／41分  
日・英・西・独・仏・  
葡・中・インドネシ  
ア・タイ語版

■企画

(財)自然農法国際研  
究開発センター  
MOAプロダクショ  
ン

スタッフ

■製作

村山英治  
村山英世

■脚本・演出

村山正実

■撮影

藤井敏貴

■顕微鏡撮影

浅野 勲

■音楽

間宮芳生

■解説

草野大悟

文部省選定

1984年教育映画祭最優秀作品賞・文部大臣賞  
第22回日本産業映画コンクール日本産業映画賞  
第25回科学技術映画祭科学技術庁長官賞  
第28回日本紹介映画コンクール金賞  
キネマ旬報文化映画ベスト・テン第7位  
サラゴサ国際農業映画祭銀賞（スペイン）  
サンタレン国際農業映画祭金賞（ポルトガル）  
国際環境映画・TV番組祭合理的な栄養の会賞（チェコスロバキア）

〔監修〕

京都大学名誉教授 満田久輝  
京都大学農学部教授 坂本慶一  
〔顕微鏡撮影指導〕  
京都大学農学部助教授 小林達治

「食」と「農」の問題は私たちの健康の中心となる問題である。この映画は、健全な作物を作り出す「生きている土」とは何かを科学的にとらえ、その土づくりに取り組む須賀一男さんの自然農法の実践を描いている。

工業化志向の今日の価値体系に対して、自然の力を見なおす価値体系としての貴重な報告であり、その成功の記録である。同時に、現代日本の農業について、多くの問題点と教訓の数々を画面から汲み取ることができる。



長い間、土を相手の農業は、森が貯えて里に流す水を利用したり、また土づくりにおいても自然の生態系を巧みに利用してきた。

ところが現代の農業は、自然の浄化力をはるかに超えた大量の殺虫剤や除草剤を使い、地上の有益な生物や土中の微生物を殺している。

このような現代農法が一般化した中で、埼玉県上里町に住む須賀一男さんは、25年間、化学肥料も農薬もまったく使わない自然農法に取り組んできた。

須賀さんは若い頃、肝臓や腎臓を悪くし、それに悩まされた挙げ句、食物が健康の根源ではないかと考え、農薬や化学肥料をやめた。そのきっかけは自分の家の竹藪に接する畑で、竹やケヤキの落ち葉の積もり具合で作物の出来が違うことに気付いたからだ。

自然農法の基本は、まず健康な土を作ることである。自然の森や原野では、植物の根が網の目のように張り、落ち葉や枯れ草が土の中の生き物によって十分に分解されているため、土は耕さなくても柔らかく、植物がよく育っている。

須賀さんは土づくりのヒントをここから得た。土づくりに欠かせない自然堆肥を、須賀さんは、稲ワラや椎茸のホダ木の廃材などを材料にして作っている。水分を十分に与え、野積みにした堆肥材料は、膨大な数の微生物や様々な小動物の働きによって発酵、分解され、半年ほどの間に、有機質に富んだ完熟堆肥が出来上がる。

研究心が旺盛な須賀さんは、農薬や科学肥料に頼らない方法をいろいろ考えだした。

